

静岡大学 理学部 同窓会会報

NO. 22

発行所
静岡大学理学部同窓会
静岡市駿河区大谷836
静岡大学理学部内
TEL 054-237-1111(代)
会長 浅野 安人

理学部の発展を願って

理学部同窓会会長 浅野 安人



静岡大学理学部は、1922年に創設された旧制静岡高等学校を母体とし、1



初めまして。平成19年4月より理学部長を務めることになりました村井です。私は平成14年1月に東北大学大学院理学研究科より、当理学部の化学科の教員として赴任してまいりました。また、平成18年度は、その年に新設された国際交流センターのセンター長として静岡大学の国際化に力を注いでまいりました。その前の年までは、学長の指導の下に、理系博士課程からなる創造科学技術大学院の立ち上げをお手伝いしてまいりました。その過程で静岡大学の抱える本質的な問題点、

道新幹線が開業して3年目、その年の11月にアポロ4号が有人で月の周回に成功し、東名高速自動車道の建設中で一部開通は翌年、という時でした。いつの間にか、歳月が流れ、当時お茶畑だった片山の地が立派な学問の府に変貌しました。さて、平成18年度科学技術白書を見ると、国家基幹技術として次の五項目があげられています。1、科学技術を牽引する世界最高水準の「次世代スーパーコンピュータ」。2、放射光とレーザーの特徴を併せ持ち、従来の手法では実施不可能な分析を可能とする「線自由電子レーザー」。3、地球温暖化の解明・影響予測、地震・津波の発生メカ

をしましたが、その前にもう一度大きな移動をしています。それは、今から40年前の1967年です。それまでの静岡大学は、浜松市の工学部のほか、磐田市に農学部、静岡市に教育・人文・理学部、三島や浜松にも教育学部の分校と分散していた各学部を1、2年は工学部も含め教養部として静岡に全学生が集う統合移転、今の大谷・片山地区に新しい校舎の建設が始まったのです。ちょうど、東海

949年6月に国立静岡大学として設置された文理理学部に端を発します。16年後の1965年に、文理改組により理学部が発足してから、2004年3月まで39年間、国立大学の理学部として存在しました。2004年4月に国立大学法人となり組織として大きな変革

室に在る時間が極端に減り、学生達には大変迷惑をかけております。幸い、学生達は科学への強い気持ちを持っており、自分で成長しています。これは理学部の学生の良い面でしょうか。ここで、昨年12月に学部長選挙で理学部長に選出さ

10代20代の若者が大勢います。自然を理解し、そこから新しい発見をし、そして自分なりの自然観を手に入れて行く過程は、出世や金銭収入とは次元を異にするものなのです。多くのそういう学生が理学部を目指して入学してきていると信じ

そのような合理的な考え方は次の世代に引き継がれていくものです。したがって、いかなる理学部にしていくべきかで、理学部を卒業して行く学生の将来に大きく影響を与えることになりま

でありましょう。また、みなでフェアーな雰囲気の中で教育と研究に取り組む必要があります。平等という言葉は、研究スペース、配属学生数、研究費などを均等にすべきことなのでしょう。みなでフェアーを感じるためにはバランスの取れた競争原理と協力が大切です。研究で力を発揮できる人にはそれだけの環境を、教育で光っている人にはそれなりの待遇を与えることができる理学部にしていくべきだと考えています。もちろん、そういう教育と研究の進展には、同窓会の先輩たちの激励のお言葉や、具体的な活動が不可欠であることは言うまでもありません。理学部からの積極的情報発信を心がけますので、これからの理学部を暖かく見守り、また激励・ご支援を頂きたいと思

「挨拶と理学部のあるべき姿」

理学部長 村井 久雄

誘起電子移動反応、抗酸化物質の反応機構、膜界面におけるラジカルのスピントイナミクス、電子素子におけるスピンドイナミクスなど、基礎を重視し、さらに応用までの電子スピンの関係した研究を行っておりま

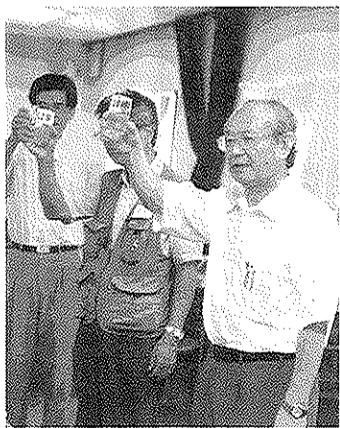
れて最初に考えたことを述べたいと思います。現在は科学・技術の即応用を賞美する風潮があります。その中で理学部のあるべき姿勢が何であるか考えてみることは大切であります。理科離れと言われる今日においても、純粋なサイエンスへの思いが心に詰まっている

ております。もちろん、現実には卒業後は多くの学生は会社に就職したり、中学・高校の教員になったりしていくのですが、彼ら彼女らが理学部で得た研究体験、そして身に着けた合理的なもの、その考え方は、深く人生観に影響を与え、結果的には充実した人生に結びつき

理学部をこれから今以上に元氣付け、発展させていくためには、理学部の異なった学科の学生および教職員との相互理解と協力が必

静岡大学理学部同窓会第6回通常総会が、静岡大学理学部B棟202号室にお

理学部同窓会 第6回通常総会開催



る活発な意見交換が行われました。審議内容の詳細は、総会報告をご覧ください。総会の後、希望者への総合研究棟施設見学が行われました。参加者は進化を続けている大学の研究施設を見て、今後の理学部の発展への期待が高まったようでした。

いて、2006年8月19日(土)午後開催されました。総会に先立って、相原理学部長の挨拶があり、理学部の支援に対する同窓会への期待が述べられました。総会では、会計報告、事業報告の他に、会則改訂も審議され、静岡大学理学部への支援体制、今後の理科教育のあり方をめぐって当初予定時間を大幅に超過す

15時半より、B棟2階の大会議室において懇親会が開催されました。来賓として参加してくださった石川勝利前理学部長から心こもった挨拶をいただきました。また、静岡交響楽団の団員による演奏会も会場の雰囲気盛り上げてくれました。次回はさらに多数の参加を期待したいと思います。

理学部同窓会連絡会より

和田 秀樹

- 平成18年度の活動報告
- 今年度は下記の活動を行いました。
- 1、理学部同窓会通常総会開催 8月19日(土)
 - 2、理学部講演会への支援 今年3件に支援
 - 4月18日、木村榮一氏
 - 12月7日村上陽一郎氏
 - 2月1日、川那部浩哉氏
 - 3、卒業研究抄録誌の発行
 - 4、大学院理学同窓会寄付講義の開催(5回開催)
 - 7月13日、杉浦克己
 - 10月5日、市原啓子
 - 11月16日、北川浩之
 - 12月14日、曾根祥治
 - 同25日、高橋美紀
 - 5、同窓生の活動
 - HPの充実、理学部同窓生の活動の情報を加えた。
 - 6、静岡大学理学部同窓会
- 会報21号を発行
静岡大学理学部同窓会
会則の改定をした。
第6回通常総会の報告また、左記の事項について協議、決定しました。
- (1)理学部同窓会名簿の発行
 - (2)来年度の寄付講義の計画
 - (3)理学部・大学院理工学研究科卒業研究抄録誌 平成19年3月発行。各教員を通じて、学生に周知をお願いする。
 - (4)理学部同窓会連絡員への依頼(今年度卒業生・修了生から1、2名の学年連絡員を選んでください)
 - (5)同窓会会報編集 三重野氏に大学の編集係をお願いする。
- 今後とも、理学部の発展のために、卒業生各位のご支援をお願いいたします。

退任教員 からの挨拶

数学科

教授 佐藤宏樹



「最終講義を終えて」
昭和45年に
静岡大学に赴
任してから38

年が経とうとしていますが、2月16日に最終講義を私も行いました。年度末の金曜日という日もあり、卒業生の方々の出席はあまり期待できないと思っておりましたが、実に沢山の皆さんがお見え下さいました。その中には、私のゼミの第一期生である浦川大作さん、大学院修士課程第一期生の木下永生さんもみえました。また、香川の大井さん、新潟の仁平さん、桐生の石井さんなど遠方からの方もみえました。字数の制限でおみえになつた方全員をあげられないことをお許し下さい。沢山の皆さんと久しぶりにお会いし、欲談できたことをとても嬉しく幸せに思っております。中には、私の持つているイメージと異なり、お名前を思い出せなくて失礼をした方もみえました。お許しください。お話ししているうちに昔を懐かしく想いだし、楽しく欲談することができました。このようならばいい機会をアレンジして下さいました。奥村先生に心より感謝しております。沢山の学生と出会えたことは私の人生をどれほど豊かにしたか、また意義あるものにしたかと、その幸せを感謝しております。学生との箱根、伊豆、富士山乗鞍、上高地などの旅行の写真をお手紙から整理しようと考へております。「学生は私にとって宝である」。有難うございました。

※最終講義は、理学部B2

02教室で「イナボツのうさぎ」という題目で行われました。

化学科

教授 谷本光敏



「理学部での思い出」
今振り返つてみると早いもので、学生の

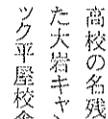
のいない民間の研究所(財)相模中央化学研究所から静岡大学理学部化学科に來てもう19年経過してしまいました。この間に短寿命分子を検出し、構造を決定するマイクロ波分光装置を新たに制作しました。マイクロ波分光器は市販の装置がないので、手作りです。初めてのはんだ銲をもつて、「化学の実験室のようには見えませんが」と言いながらも研究室に來た学生の人が一生懸命頑張つてくれていたのを思い出します。この装置はその後よく稼働し、現在は他の研究グループが行なえない金属を含む活性短寿命分子の検出に活躍しています。

生物科学科
助教 野口基子

「静大での40年を振り返つて」
昭和42年4月に静岡大学理学部生物学科の助手として始まった私の大学教員生活は、旧制静岡高校の名残を色濃くとどめた大岩キャンパスの木造バラック平屋校舎から始まりまし

理学部生物学科

教授 立島 章



今年3月、静岡大学理学部を定年退職します。化学科の立島です。私は昭和45年4月から37年間無機および分析化学研究室で「キラルな金属錯体の合成および立体選択的溶液内反応」に取り組んでまいりました。着任当時の研究室は、小辻奎也教授、宇津野峻司助教、助手の私という構成で、大岩から大谷にキャンパス移転を終えて間もない時期でした。その後研究室は、B棟3階からC棟2階へ、さらに現在のA棟3階へと移動し、慌ただしく37年間が過ぎました。その間、多くのすばらしい学生さんに恵まれ、楽しく充実した研究生活を送らせて頂き感謝の気持ちでいっぱいです。また、多くの先生方から頂いたこれまでのご支援・ご指導に対し心よりお礼申し上げます。当研究グループには4月から加藤知香先生が着任されます。遷移金属の化学を中心とした研究が益々発展することを期待しています。

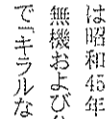
た。この構内はなにか懐かしい風情で、風のない夕方に浅間神社に続く丘陵からほのかに漂う花の香りがみかんの花だとかわかつた時の感激は今も忘れません。1年後には大谷が大谷へ移転すると言われ、希有の事態に遭遇し、実験設備は今のようなカタログがある訳でなく、静岡の地場産をよもぎ、化学の実験室のようには見えませんが」と言いながらも研究室に來た学生の人が一生懸命頑張つてくれていたのを思い出します。この装置はその後よく稼働し、現在は他の研究グループが行なえない金属を含む活性短寿命分子の検出に活躍しています。

物理学科
教授 山際敬一郎

「定年退職をむかえて」
今年3月、静岡大学理学部を定年退職します。化学科の立島です。私は昭和45年4月から37年間無機および分析化学研究室で「キラルな金属錯体の合成および立体選択的溶液内反応」に取り組んでまいりました。着任当時の研究室は、小辻奎也教授、宇津野峻司助教、助手の私という構成で、大岩から大谷にキャンパス移転を終えて間もない時期でした。その後研究室は、B棟3階からC棟2階へ、さらに現在のA棟3階へと移動し、慌ただしく37年間が過ぎました。その間、多くのすばらしい学生さんに恵まれ、楽しく充実した研究生活を送らせて頂き感謝の気持ちでいっぱいです。また、多くの先生方から頂いたこれまでのご支援・ご指導に対し心よりお礼申し上げます。当研究グループには4月から加藤知香先生が着任されます。遷移金属の化学を中心とした研究が益々発展することを期待しています。

化学科

教授 相原 惇一



1981年静岡大助教、1989年教授、2005年理学部長、2006年日本化学会賞受賞、国際数理化アカデミー会員。

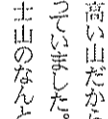
「将来を担う若者と」
平成18年度6月1日に静岡大学に着任いたしました毛利と申します。私は日本の大学を卒業してすぐにアメリカに渡り、大学院卒業後アメリカ各地の大学で教鞭をとって参りましたが、この度15年ぶりに日本に生活することになりました。日本に久しぶりに帰ってきて、日本とアメリカの大学の違いが目につきます。今日本の大学はアメリカのシステムを何でも取り入れようとしている

理学部生物学科
教授 山際敬一郎

「私の専門は」
私の専門は、数学基礎論(数学基礎論とも呼ばれる)数理論理学の一分野である公理的集合論です。(まだまだ短いですが、経験上)多くの方が「集合論」という専門分野に誤解をもたれているようです。別に集合論について研究している訳でなく、「無限集合上の組合せ論」という言い方が適切だと思ひます。数理論理学の手法を活用することにより、「連続体仮説のような数学的命題を、数学の公理体系から(形式的に)証明できないことを、(その外で)証明する」という、一見矛盾しているかのようなことを研究しております。1966年のフィールズ賞受賞者であるPaul Cohenが開発し、後にRobert SolovayやSaharon Shelahなどにより発展してきている強制力という手法を主に用います。世界的にマイナーな分野ですが、この専門家でしか証明できない様々な未解決問題を打ち破ってきた偉大な先輩方に少しでも

化学科構造化学講座

助手 大吉崇文



静岡大学に最初を訪れたときの印象は、とにかく「山」の一言につきま

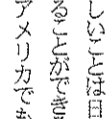
「山のある暮らし」
静岡大学に最初を訪れたときの印象は、とにかく「山」の一言につきます。遠くからでもわかる山にかかる静岡大学の文字、また教室に辿り着くのに登らないといけない定年坂と呼ばれる急な坂道や稲妻階段と呼ばれる更に急な石階段。これはさぞかし大変な毎日になるだろうなあと感じていました。その予感はある意味的の予感を感じていました。静大に着いてから1年が過ぎようとしています。静大はこれまで私が住んできた地域と違い、非常に温暖で過ごしやすく山と海に囲まれた自然豊かな土地で、私にとって癒しを感じられる場所です。街から山の方にちやうと足をのぼすと昔ながらの吊り橋がそこにはあり、秋には見事な紅葉が見ることができ、また違った贅沢な空間が広がっています。このような素晴らしい環境の中でこれから本格的に研究教育活動を始められることを非常に嬉しく思います。今では定年坂や稲妻階段を難なく登ることができるようになりましたが、本当に超えなくてはならない山はこれからです。周りの先生方のお力を借りながら前に進んでいき、学生と共に人間として成長していけたらと思ひます。

理学部生物学科
教授 山際敬一郎

「この1年を振り返って」
静岡大学に教員として赴任してから1年が経とうとしています。ここに赴任する前は国立の研究所に研究員として勤務しており、大学で経験することのすべてが初めてのことはわかりました。また、大学の行事・雑務の多さにも驚くばかりで正直いってこの1年はなんとかすべてを無難にこなしていかただけで精一杯といった感じでした。しかし、これからはおじさんおばさんばかりの職場(もちろん若い人もいますが)であったのが、「学生さん」というエネルギーのある若い人たちに囲まれ、忙しいながらも自分もそのエネルギーのせいか新たな意欲がわいてくるのを感じています。この1年過ごしてみても、静大は非常に素直でまた大きなポテンシャルを秘めている学生が多いという印象を受けています。この学生たちが成長してこれからの社会を背負っていくよう教育に力を注ぐとともに、自分も学生さんたちのエネルギーをもち静大発の独創性のある研究を進めていきたいと考えています。

化学科構造化学講座

助教 山本 歩



静岡大学に赴任してからの1年が経とうとしています。ここに赴任する前は国立の研究所に研究員として勤務しており、大学で経験することのすべてが初めてのことはわかりました。また、大学の行事・雑務の多さにも驚くばかりで正直いってこの1年はなんとかすべてを無難にこなしていかただけで精一杯といった感じでした。しかし、これからはおじさんおばさんばかりの職場(もちろん若い人もいますが)であったのが、「学生さん」というエネルギーのある若い人たちに囲まれ、忙しいながらも自分もそのエネルギーのせいか新たな意欲がわいてくるのを感じています。この1年過ごしてみても、静大は非常に素直でまた大きなポテンシャルを秘めている学生が多いという印象を受けています。この学生たちが成長してこれからの社会を背負っていくよう教育に力を注ぐとともに、自分も学生さんたちのエネルギーをもち静大発の独創性のある研究を進めていきたいと考えています。

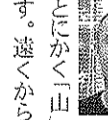
「1年目の感想」
早いもので、去年の4月に静大に赴任してからの1年近くになりました。こちらに赴任する前は、大学研究所の助手を6年間やつて、そのあと4年間も間、研究員として海外留学をしていましたので気楽な身分でした。こちらに

理学部生物学科
教授 山際敬一郎

「私の専門は」
私の専門は、数学基礎論(数学基礎論とも呼ばれる)数理論理学の一分野である公理的集合論です。(まだまだ短いですが、経験上)多くの方が「集合論」という専門分野に誤解をもたれているようです。別に集合論について研究している訳でなく、「無限集合上の組合せ論」という言い方が適切だと思ひます。数理論理学の手法を活用することにより、「連続体仮説のような数学的命題を、数学の公理体系から(形式的に)証明できないことを、(その外で)証明する」という、一見矛盾しているかのようなことを研究しております。1966年のフィールズ賞受賞者であるPaul Cohenが開発し、後にRobert SolovayやSaharon Shelahなどにより発展してきている強制力という手法を主に用います。世界的にマイナーな分野ですが、この専門家でしか証明できない様々な未解決問題を打ち破ってきた偉大な先輩方に少しでも

化学科構造化学講座

助手 大吉崇文



静岡大学に最初を訪れたときの印象は、とにかく「山」の一言につきま

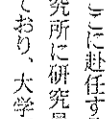
「山のある暮らし」
静岡大学に最初を訪れたときの印象は、とにかく「山」の一言につきます。遠くからでもわかる山にかかる静岡大学の文字、また教室に辿り着くのに登らないといけない定年坂と呼ばれる急な坂道や稲妻階段と呼ばれる更に急な石階段。これはさぞかし大変な毎日になるだろうなあと感じていました。その予感はある意味的の予感を感じていました。静大に着いてから1年が過ぎようとしています。静大はこれまで私が住んできた地域と違い、非常に温暖で過ごしやすく山と海に囲まれた自然豊かな土地で、私にとって癒しを感じられる場所です。街から山の方にちやうと足をのぼすと昔ながらの吊り橋がそこにはあり、秋には見事な紅葉が見ることができ、また違った贅沢な空間が広がっています。このような素晴らしい環境の中でこれから本格的に研究教育活動を始められることを非常に嬉しく思います。今では定年坂や稲妻階段を難なく登ることができるようになりましたが、本当に超えなくてはならない山はこれからです。周りの先生方のお力を借りながら前に進んでいき、学生と共に人間として成長していけたらと思ひます。

理学部生物学科
教授 山際敬一郎

「私の専門は」
私の専門は、数学基礎論(数学基礎論とも呼ばれる)数理論理学の一分野である公理的集合論です。(まだまだ短いですが、経験上)多くの方が「集合論」という専門分野に誤解をもたれているようです。別に集合論について研究している訳でなく、「無限集合上の組合せ論」という言い方が適切だと思ひます。数理論理学の手法を活用することにより、「連続体仮説のような数学的命題を、数学の公理体系から(形式的に)証明できないことを、(その外で)証明する」という、一見矛盾しているかのようなことを研究しております。1966年のフィールズ賞受賞者であるPaul Cohenが開発し、後にRobert SolovayやSaharon Shelahなどにより発展してきている強制力という手法を主に用います。世界的にマイナーな分野ですが、この専門家でしか証明できない様々な未解決問題を打ち破ってきた偉大な先輩方に少しでも

化学科構造化学講座

助教 山本 歩



静岡大学に赴任してからの1年が経とうとしています。ここに赴任する前は国立の研究所に研究員として勤務しており、大学で経験することのすべてが初めてのことはわかりました。また、大学の行事・雑務の多さにも驚くばかりで正直いってこの1年はなんとかすべてを無難にこなしていかただけで精一杯といった感じでした。しかし、これからはおじさんおばさんばかりの職場(もちろん若い人もいますが)であったのが、「学生さん」というエネルギーのある若い人たちに囲まれ、忙しいながらも自分もそのエネルギーのせいか新たな意欲がわいてくるのを感じています。この1年過ごしてみても、静大は非常に素直でまた大きなポテンシャルを秘めている学生が多いという印象を受けています。この学生たちが成長してこれからの社会を背負っていくよう教育に力を注ぐとともに、自分も学生さんたちのエネルギーをもち静大発の独創性のある研究を進めていきたいと考えています。

「1年目の感想」
早いもので、去年の4月に静大に赴任してからの1年近くになりました。こちらに赴任する前は、大学研究所の助手を6年間やつて、そのあと4年間も間、研究員として海外留学をしていましたので気楽な身分でした。こちらに

理学部生物学科
教授 山際敬一郎

新任教員 からの挨拶

数学科数理講座
教授 田中直樹

「赴任後1年の私」
昨年の4月に岡山大学が

理学部生物学科
教授 山際敬一郎

静岡大学

天岸祥光学長

最終講義

平成19年3月6日(火)15時〜17時に、静岡キャンパスの共通教育A棟301教室、浜松キャンパスの情報学部大会議室にて、この3月で退官される天岸祥光学長(前理学部長)の最終講義が学内外の多数の出席者を集めておこなわれた。演題は、「静岡大学36年の星霜」で、1)プラズマ物理学に魅せられて、2)科学時代に生きて、3)国立大学法人化を経験して、の三つのサブテーマが、豊かな経験に基づいて語られ、その穏やかな人柄がしのばれる講義であった。

養部 ●昭和48年4月静岡大学助教授養部 ●昭和58年10月静岡大学教授養部 ●平成7年10月静岡大学教授理学部 ●平成11年4月静岡大学理学部長 ●平成15年4月静岡大学学長 ●平成16年4月国立大学法人静岡大学学長 (平成19年3月)

相原教授(理学部長)が日本化学会賞を受賞

2007.01.19



芳香族の安定性解明

国内最大の化学系学会、日本化学会は1月15日、理事会を開き、本学部化学科の相原惇一教授(現理学部長)の甲のような構造(六角形)を決定した。相原教授は、これまで110年間、説明できなかった芳香族分子の不安定要因となる二重結合を持つにもかかわらず、安定している。相原教授は分子の形とエネルギーの関係に着目し、従来の電子顕微鏡では観察することができなかった液体中の構造や電子線に弱い有機物を観察することに成功した。

ら6名に今年度の日本化学会賞を授与することを決定した。《静岡新聞1月16日朝刊》「相原大教授に日本化学会賞 芳香族の安定性解明」国内最大の化学系学会の日本化学会は15日、本年度のベンゼンに代表される「芳香族分子」という分子がなぜ安定なのか、化学界1000年来の謎を解明した「芳香族性理論」が認められた。静岡大からの受賞は初。

正式な受賞研究テーマは環状π共役系の芳香族性の理論的解明。北海道大助手だった1975年に発表し、国際的にも高く評価されている。芳香族分子の安定性の理由はドイツの化学者ケクレが1865年にベンゼンの六角形構造を提唱後、欧米の化学者を中心に議論されてきたが、相原教授の解明まで110年間、説明できなかった。芳香族分子は一般に分子の不安定要因となる二重結合を持つにもかかわらず、安定している。相原教授は分子の形とエネルギーの関係に着目し、従来の電子顕微鏡では観察することができなかった液体中の構造や電子線に弱い有機物を観察することに成功した。

どんな環状構造であれば安定かという判定基準を確立したといえ、すべての分子について芳香族分子か否かが分かる。相原教授はこの問題が長い間未解決だったことを知り、研究しようとした。若いころアイデアが出たのは幸運。学会で公式に認められてうれしいと話している。◇相原惇一氏(あいはら・じゅんいち) 徳島県出身。東大卒。理学博士。1970年北海道大助手。81年静岡大助教授、89年現職。国際数理化学アカデミー会員。

←新任教員からの挨拶 来てからは一転して、自分の研究室を構え授業や学生実験を任せられるようになるなど、次から次へと今まで経験のなかったことが押し寄せてくるような感じで、戸惑いながらも毎日を通してあります。しかし幸いにも理学部の先生方や事務職員の方々には本当に色々とお助けいただきました。私の研究室も村井先生をはじめとする多くの先生や学生の方々に助けていただき、ようやく本格的な研究ができる体制になりました。私はまだまだ未熟ですが、これからも静岡大の教育と研究活動の発展のために尽力していきたいと思っております。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

生物科学科生体調節学講座 助手 石原顕紀 「母校に戻って」 私は、平成8年に静岡大理学部生物地球環境科学科に新学科第一期生として入学し、同大学院理工学研究科、さらに千葉大学大学院医学薬学府に進学しました。平成18年度より、改組された理学部

生物科学科の助手に赴任し、再度「一期生」として母校に戻ってくる事ができました。大きな喜びを感じております。現在「一年生」であり、右も左も分からず、先生方にご迷惑をおかけしてばかりですが、実習や卒業研究等、学生と接し指導することには常に新鮮な感覚があり、非常に楽しく感じられる毎日です。前回はハイオインフオマティクス系のベンチャー企業に勤務しており、就職相談等も含め、母校である静岡大理学部の発展のため努力していく所存です。

X線自由電子レーザー (XFEL) 理学部研究所では、XFELの実現に必要な要素技術をすでに確立しており、現在、その利用研究に必要な技術開発を行うための、波長60ナノメートルの真空紫外レーザーを発信する試作機の建設を行っている。このXFELは強力なX線を発生し、放光の特長を持ち、「レーザー」の作成を活用した処理によって短時間の現象の補足を可能にするこ

とができ、「夢の光」とも呼ばれている。また、自由電子レーザーについて、高出力を可能にし、X線領域の非常に短い波長を実現することによって短時間での原子・分子レベルでの構造解析や、より高速な動態・変化の捕捉、より精密な計測の実現を可能にする技術である。巨大タンパク質の分子構造解析や電子部品等の中の電子挙動に関する超高速現象の解明が可能となることが期待される。

「充実した一年」 静岡大学に 着任し、早くも1年が経とうとしています。振り返ると講義の準備と研究でも充実した1年だったと思えます。

私は、平成8年に静岡大理学部生物地球環境科学科に新学科第一期生として入学し、同大学院理工学研究科、さらに千葉大学大学院医学薬学府に進学しました。平成18年度より、改組された理学部

生物学的手法を用いて、甲狀腺ホルモンと血中ホルモン結合タンパク質の結合に及ぼす内分泌攪乱化学物質の影響について解析しております。近年、化学物質が、甲狀腺ホルモン作用メカニズムの中の細胞核内でのイベントに影響を及ぼすことが明らかになっており、これらのメカニズムについて分子生物学的、バイオインフォマティクスの手法を用いて解析をしたいと思いますと考えております。

電子顕微鏡は可視光線よりも波長の短い電子線を用いて観察することにより、原子レベルの物質を観察することができると言われていますが、高エネルギーの電子線を観察対象に照射するため、結合の弱い分子や結晶が壊れてしまうなど観察対象の選定にはいくつかの制約が存在していた。大学と企業が共同開発した極低温電子顕微鏡では、電子線による分子や結晶の損傷が、マイナス270℃付近の極低温になると大幅に低減される現象を利用

また、極低温下の膜タンパク質の乾燥による試料の変性を防ぐ急速冷却法、タンパク質周辺の水分からなる氷から散乱するノイズを抑えるためのエネルギーフィルター、

また、極低温下の膜タンパク質の乾燥による試料の変性を防ぐ急速冷却法、タンパク質周辺の水分からなる氷から散乱するノイズを抑えるためのエネルギーフィルター、

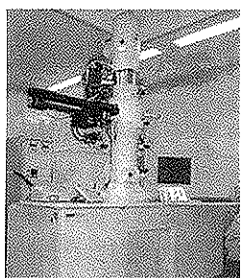
また、極低温下の膜タンパク質の乾燥による試料の変性を防ぐ急速冷却法、タンパク質周辺の水分からなる氷から散乱するノイズを抑えるためのエネルギーフィルター、

また、極低温下の膜タンパク質の乾燥による試料の変性を防ぐ急速冷却法、タンパク質周辺の水分からなる氷から散乱するノイズを抑えるためのエネルギーフィルター、

また、極低温下の膜タンパク質の乾燥による試料の変性を防ぐ急速冷却法、タンパク質周辺の水分からなる氷から散乱するノイズを抑えるためのエネルギーフィルター、

また、極低温下の膜タンパク質の乾燥による試料の変性を防ぐ急速冷却法、タンパク質周辺の水分からなる氷から散乱するノイズを抑えるためのエネルギーフィルター、

また、極低温下の膜タンパク質の乾燥による試料の変性を防ぐ急速冷却法、タンパク質周辺の水分からなる氷から散乱するノイズを抑えるためのエネルギーフィルター、



また、極低温下の膜タンパク質の乾燥による試料の変性を防ぐ急速冷却法、タンパク質周辺の水分からなる氷から散乱するノイズを抑えるためのエネルギーフィルター、

また、極低温下の膜タンパク質の乾燥による試料の変性を防ぐ急速冷却法、タンパク質周辺の水分からなる氷から散乱するノイズを抑えるためのエネルギーフィルター、

また、極低温下の膜タンパク質の乾燥による試料の変性を防ぐ急速冷却法、タンパク質周辺の水分からなる氷から散乱するノイズを抑えるためのエネルギーフィルター、

また、極低温下の膜タンパク質の乾燥による試料の変性を防ぐ急速冷却法、タンパク質周辺の水分からなる氷から散乱するノイズを抑えるためのエネルギーフィルター、

また、極低温下の膜タンパク質の乾燥による試料の変性を防ぐ急速冷却法、タンパク質周辺の水分からなる氷から散乱するノイズを抑えるためのエネルギーフィルター、

また、極低温下の膜タンパク質の乾燥による試料の変性を防ぐ急速冷却法、タンパク質周辺の水分からなる氷から散乱するノイズを抑えるためのエネルギーフィルター、

また、極低温下の膜タンパク質の乾燥による試料の変性を防ぐ急速冷却法、タンパク質周辺の水分からなる氷から散乱するノイズを抑えるためのエネルギーフィルター、

技術情報

また、極低温下の膜タンパク質の乾燥による試料の変性を防ぐ急速冷却法、タンパク質周辺の水分からなる氷から散乱するノイズを抑えるためのエネルギーフィルター、

また、極低温下の膜タンパク質の乾燥による試料の変性を防ぐ急速冷却法、タンパク質周辺の水分からなる氷から散乱するノイズを抑えるためのエネルギーフィルター、

また、極低温下の膜タンパク質の乾燥による試料の変性を防ぐ急速冷却法、タンパク質周辺の水分からなる氷から散乱するノイズを抑えるためのエネルギーフィルター、

また、極低温下の膜タンパク質の乾燥による試料の変性を防ぐ急速冷却法、タンパク質周辺の水分からなる氷から散乱するノイズを抑えるためのエネルギーフィルター、

また、極低温下の膜タンパク質の乾燥による試料の変性を防ぐ急速冷却法、タンパク質周辺の水分からなる氷から散乱するノイズを抑えるためのエネルギーフィルター、

また、極低温下の膜タンパク質の乾燥による試料の変性を防ぐ急速冷却法、タンパク質周辺の水分からなる氷から散乱するノイズを抑えるためのエネルギーフィルター、

2006年度 理学部ニュース

- 3月 杉山剛氏(本学部卒業生)が化学教育有功賞を受賞
4月 平成18年度から生物地球環境科学科は生物科学科と地球科学科に変わりました
4月 世界初の快挙! 深海底掘削で上部海洋地殻を貫通
5月22-26日 宮内英夫君が国際会議でポスター賞を受賞
6月 松田教授(数学科)が関数解析学の著書を刊行
6月 山田晋之介君が日本古生物学会優秀ポスター賞を受賞
7月 近藤助教授が新機能性物質を合成(化学工業日報7/15)
8月2日 理学部夏季オープンキャンパスが多数の参加者をえて開かれた
8月19日 理学部同窓会通常総会が開催される
9月 阿部助教授(故)のウミホタル発光機構が脚光を浴びる
9月 本学部受験生必見、「蛍雪時代」9月号のインタビュー記事
9月 加藤憲二教授が岡崎高等生物学コンファレンス(9/10-15)の共同議長に
9月 理学部卒業生(藤原西沙子さん)が政府インターネットテレビ番組に出演
9月 日本地方地質誌「中部地方」が出版される
9月 依岡講師(数学科)が日本数学会賞建部賞を受賞
9月25日 西川祐介君が清水東高で英語による授業を行なう
10月 北村助教授(地球科学科)が日本古生物学会学術賞を受賞
11月 小堀助教授(化学科)が電子スピンスイニエンス学会奨励賞を受賞
9月20-23日 分子構造総合討議会2006が開催される(静岡市グランシップ)
11月 加藤教授(地球科学科)が日本微生物生態学会会長に再選される
11月 三浦智明君(博士後期課程2年)が電子スピンスイニエンス学会で優秀発表賞を受賞
12月7日 理学部講演会 村上陽一郎先生「安全と安心の科学:生きるための知恵」
12月14日 次期理学部長に村井教授(化学科)が決まる
2月1日 理学部講演会 川部浩哉先生「科学の多様性(仮題)」
1月15日 相原教授(理学部長)が日本化学会賞を受賞(静岡新聞1/19)
2月14日 物理学科 山際敬一郎先生最終講義(理学部B202)
2月16日 数学科 佐藤宏樹先生最終講義(理学部B202)
3月6日 天岸祥光学長(前理学部長)最終講義(共通教育A301/情報学部大会議室)
3月22日 理学部卒業式が開催される
詳しくは静岡大学理学部ホームページをご覧ください。
http://www.shizuoka.ac.jp/rigaku/

窓の窓

強さとは

山尾 節子

私は大学院卒業後の2年間、ケニアの最も貧しい地域のひとつであるマクエニという県で理数科教師として働いていました。

協力隊参加の理由は、教員になるために、そして病気で亡くなった祖父の看護にたいして自分が納得できず、強くなる必要があると考えたからです。ですから厳しい生活も覚悟していたつもりでした。

私の村には、電気も水も肉屋もありませんでした。食堂では蟻で真つ黒な料理を食べさせられ、茶緑色に濁った池の水を飲み、たら

近づき品物を騙し取ろうとしました。

このような現実には、赴任当初に抱いた希望や新鮮な喜びを失望へと変えさせるのに十分でした。私はここで自分の弱さと、無知を自覚したに過ぎません。しかし一部のケニア人は、そんな私にも寛容な態度で接してくれました。それが、「数学をケニアの生徒に教えた」という私の夢を思い起こさせ、彼らへの情も深まり、当初にも増して私は努力し走り続けることができました。彼らがいなかったら、一度は挫折しかかった自分の仕事も最後まで遣り通すことができたのです。

彼らは確かに貧しく、厳しい生活をしていました。しかし、だからといって彼らが不幸であるとは限りません。実際に彼らから笑顔が消えることはありませんし、大家族で育ったせいもあると思うのですが、他人を許し受け入れる能力があります。私は彼らと同等に生活し苦

労を共にすることで、以前よりは成長し、自分の中で少しだけ定義が変わった「強さ」も身につけることができました。「強さ」とは鈍感になることではなく、弱さを含みそれを許容できる自信と寛容な態度であるということだと思います。

なにも無かったからこそ身一つで勝負しなければならず、それが自分の成長のチャンスへとつながったのだと考えます。

数学科(平成10年入学) 理学部同窓会への 合流を夢みて 水口好美 昭和44年4月、静岡大学

いに3cmの水で入浴を済ませていました。交通事故や強盗などの身を脅かす事件は日常的に起こり、象に民家を破壊されることもありました。そして部屋には巨大なシロアリの巣ができて、サソリも戦いを挑んできました。天井からは泥や虫、腐った梁まで落ちてくることがありましたし、朝早くから物乞いが家に訪ねて来るなど、いつでもどこにいても心休まることはありませんでした。また多くのケニア人が求めるものは資金面での援助であり、協力隊ではありませんでした。それ故に様々な人間が、金持ちといわれる日本人の私に

文理学部が改編され、理学部と人文学部が発足した。

私は、同年3月、静岡市大岩の地での文理学部理学科卒業生の一人である。同期に入学した理学科生は61人。物・化・生・数・地学科に所属、ほとんど県外出身者だった。同期の仲間には、和気藹々の関係があった。また、理学科以外の学生や先輩とも気軽に交流できる雰囲気があった。尊敬すべき個性のな多くの教官からも感化を受けた。このことから青春の志がさらに高揚したものだ。それは自分の人生にとつてかけがえのないものとなつていく。

ところで、文理学部同窓会は人文学部同窓会と合体した為、文理学部理学科同窓生は、理学部同窓会に合流できない。今も、理学科卒業生の一人として悲しく寂しく思っている。理学部同窓会設立の橋渡しを当時頼まれた一人として、また理学科同窓生の一人として理学部同窓会に合流できないかと夢見ている。

結びに、理学部及び理学部同窓会がますますの御発展を衷心より祈っている。(文理学部数学科卒)

理学部同窓会への 合流を夢みて 水口好美 昭和44年4月、静岡大学

理学部同窓会への 合流を夢みて 水口好美 昭和44年4月、静岡大学

静岡大学理学部同窓会 第6回 通常総会の報告

日時 2006年 8月19日(土)

会場 静岡大学理学部 B棟202号室

出席者15名 委任状2名 見直し委任状4名、所在不明4名

議長：浅野安人、議事録作成：野口和廣、議題

- 1、会計報告・事業報告
- 1-1 会計報告
- 平成10年度から平成17年度までの各年度の会計報告
- 1-2 事業報告
- 平成11年度
- 静岡創立50周年記念コンサート、第5回通常総会、理学部講演会支援、他
- 平成12年度
- 会員名簿発行、理学部講演会支援、他
- 平成13年度
- 記念コンサート、懇親会、静大モニメント制作調査費、理学部講演会支援
- 平成14年度
- 静大モニメント制作、理学部講演会支援、他
- 平成15年度
- 会員名簿発行、サイエンス

- 2、会則改訂(抜粋)
- 第3条、第13条、第14条「事務所」を「事務局」に改訂する。
- 第4条、第5条、第16条、「普通会員」を「一般会員」に改訂する。
- 第6条 下記2項を追加し、第3項を繰り下げる。
- 3 卒業研究抄録誌の発行他、会員の資質の向上に寄与する事項。
- 4 自然科学(理科・数学)教育振興のための寄附行為を行うこと。
- 第7条、第9条「会計監査」を「監事」に改訂し、「各学科1名」を「理学部同窓会連絡会委員会」に改訂する。
- 第10条「集会」を「会議」に改訂する。文面下記のとおり改訂する。「会議は、総会・役員会・理事会とする。役員会は、会長・副会長・支部長・理事・監事・顧問をもって組織する。理事会は、会長・副会長・理事をもって構成する。」
- 第14条「会費」を「会費・寄附」に改訂する。終身会費1万円を終身会費2万円以上に改訂し、下記を追記する。「2 本会の趣旨に賛同する会員は、寄附を事務局に納入できる。また、納入する寄附は、用途・目的を指定することができ、」
- 第16条 「普通会員は、毎年9月末までに、現住所及び職業等を事務局に報告しなければならない。」を「一般会員は、現住所等変更あるときは、その旨を事務局に報告すること。」に改訂する。
- 以上の会則改訂案が承認された。
- 3、改選役員の承認および委嘱承認
- 会長：浅野安人(物42)
- 副会長：清水幸洋(数42)
- 石渡達也(化42)、平松晴二(生40)、加藤和男(地40)。
- *理事：赤池大樹(数40)、野口和廣(物40)、高塚芳弘(化40)、竹下昭二(物41)、梅田勇夫(化41)、和田秀樹(地42)、土屋大二郎(数43)
- 監事：佐藤洋一(数40)
- 松山初男(物40)
- 以上の役員改選が承認された。
- 4、その他
- (1)事務局の充実のための人件費支出の承認
- 事務局を理学部内に設置することに、理学部長と事務局長の承認を受けているが、本格的に、事務局を活動させるためには、ボランティアOBの協力が必須。事務局員の手当ての他、ボランティアの旅費交通費を予算化する。
- (2)全学同窓会の役員(副会長、理事、評議員)についての承認を受けた。
- (3)理科(及数学)教育の振興のための法人立ち上げ準備への協力について
- 静岡大学理学部の将来を背負っていく人材を育成するために、中学・高校生の時代から自然科学好きにしなければならぬ。同窓会費の一部を理科教育振興のための寄附事業にあてることの承認を受けた。

アルムニ・コンサート、理学部講演会支援、他

卒業研究抄録誌発行 理学部講演会支援、他

平成17年度

卒業研究抄録誌発行 理学部講演会支援、他

平成17年度

卒業研究抄録誌発行 理学部講演会支援、他

平成17年度

卒業研究抄録誌発行 理学部講演会支援、他

平成17年度

卒業研究抄録誌発行 理学部講演会支援、他

平成17年度

卒業研究抄録誌発行 理学部講演会支援、他

平成17年度

卒業研究抄録誌発行 理学部講演会支援、他

平成17年度

卒業研究抄録誌発行 理学部講演会支援、他

平成17年度

卒業研究抄録誌発行 理学部講演会支援、他

一般会計		2006年3月31日
収入の部	繰越金	5,623,980
前年度繰越金	寄付代	2,090,000
年会費	利息	57,500
名簿	雑収入	17,775
受取	雑収入	1
雑収入	雑収入	17,775
合計		7,789,256
支出の部	印刷費	1,707,825
印通	信費	491,256
会費	事務用品費・逆金手数料等	178,768
備品	代	0
ホームページ作成	80,640	
特別講座	300,000	
事務手数料	67,300	
特別支出	0	
その他	10,000	
合計		2,835,789
差引	残高	4,953,467

事務局だより

○今年の静岡は、昨年よりも暖かくほとんど氷を見ることがありませんでした。独立法人化してから3年経過し、この春は、国立大学静岡大学の最後の入学生を送り出します。

○団塊の世代(理学部2期生の大量退職が始まる2007年問題もこれから正念場を迎えますが、何時までも探究心を失わないで若々しくありたいものだと思います。

○今年、理学卒業生名簿を発行しますが、体裁を変更し、今年の名簿から、自宅及び勤務先の電話番号を抹消します。名簿ご希望の方および友人の電話番号を知りたい方は、学籍番号を記載して、事務局までお問い合わせください。事務局のメールアドレスは、sciinfo@ipc.schizuoka.ac.jp

○この会報の愛称を募集します。会員皆様方からのご応募をお待ちいたします。困みに、人文・文理学部同窓会報は「富岳」、教育学部同窓会会報は「おおや」です。

○4月から、理学部A棟内に理学部同窓会の事務所を設置する予定にしています。祝日を除く月曜から金曜日の9時から17時に事務処理などを行うようにしたいと考えています。交通費は支給しますので、ボランティアでお手伝いいただけ方を募集します。詳細のお問い合わせは、事務局までメールでお願いします。sciinfo@ipc.schizuoka.ac.jp 野口・関

同窓会寄付講義 講師募集

平成18年度より理学研究科の講義の一つとして、理学同窓会寄付講義が開設されます(学部の学生も聴講します)。この講義は、研究機関や企業・中学校等で活躍中の理学部同窓会の会員により、企業や研究所、教育現場などで今何をして

事・顧問をもって組織する。理事会は、会長・副会長・理事をもって構成する。第14条「会費」を「会費・寄附」に改訂する。終身会費1万円を終身会費2万円以上に改訂し、下記を追記する。「2 本会の趣旨に賛同する会員は、寄附を事務局に納入できる。また、納入する寄附は、用途・目的を指定することができ、」

幸仁(生46)、金子正純生(47)、青島修(数47)、半田敏夫(数48)、佐伯泰広(地50)、鈴木富喜(数50)、杉本寿久(化50)、原川恵次(生52)